いったかが分析されている。この頃から指導者達は、政治的発言や行動よりも思想的哲学的な影響力を行使することを重視するようになり、テレビを通じた説話やインターネットのウェッブサイトで、政府よりも一般大衆にむけて主張を幅広く伝えるようになったと紹介している。なお、公的に罪科を問われず、解放のための条件もつけられず、彼らの政治的主張を維持できたまま釈放されたことは、大きな成果であった、というのが著者の見解である。

11 章で論じられているのは、釈放後の国外に向けての対応である。指導者達は、サウディアラビア政府に対するよりも、米国とイスラエルの方針に対して反対の姿勢を明示的に示すようになった。これは、シャリーアで述べられている「小さな悪よりも大きな悪に立ち向かう」という方針に沿ったもので、9.11 や米軍のイラク侵攻について、ハワーリーは当時のブッシュ大統領や米国議会に手紙を送っている。外には「対立」、内には「宥和」という「防衛」論の 2 軸の手法をうまく活用したのが、この時期の指導者達の行動であるという。

12 章では、2003 年中頃から 2006 年半ばにかけての指導者達の方針、行動をまとめている。ここで対象となっているものは、指導内容の変化、王国、国際関係、イスラーム、暴力とジハードなどの問題である。これら内外の諸問題に対して、指導者達は「宥和」的な方針を維持し、現実に即した現代イスラーム政治のあるべき姿を形成していこうとしており、その活動が詳しく紹介されている。そして最終章 13 章で、全体のまとめを行っている。

全体を通して、著者の指導者達に対する見方は好意的である。宗教的観点からの改革思想と行動の説明は十分に行われているものの、著者の仮説である「防衛」論の方針は、80 年代の理論形成の時点から確立されていたとは必ずしも言えないように思える。体制とのさまざまなやりとりの中で、紆余曲折的に「対立」から「宥和」へと移っていったという見方もでき、歴史的な展開として考えた方が説得性が高いのではないだろうか。。

サウジディアラビアは石油資源の発見と輸出により、英国の援助でかろうじて財政を維持していた貧しい国から西洋レベルの社会基盤の整った近代国家へと、この 60 年間で大きな発展をとげた。その発展プロセスにおいては、伝統社会の近代化にともない、さまざまな課題や矛盾、相克にであっている。最近では、評者の関心でもあるサウディアラビア国内のエネルギー問題も、大きな課題として浮上してきている。このような問題を研究分析するにあたって、社会変容とそれへの対応の実例を詳しく知ることは、分野を問わず非常に参考になる。本書により、ワッハーブ派本拠地の宗教界といえども一枚岩ではなく、多様な意見、動きがあることがわかり、そしてこれを通じてサウディアラビアのイスラームも変わりつつあることが理解でる。サウディアラビア社会で機能しているイスラームをより現実的かつ詳細に理解する一助となり、その社会を一層深く多面的に捉えることを可能ならしめるものとなっており、サウディアラビアにおける近代化や発展とは何か考える際に示唆に富む一冊であると言えよう。

（萩原　淳　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Gabriele Marranci. 2008. *The Anthropology of Islam*. New York: Berg, ix+182pp.

Gabriele Marranci は、1973 年イタリア生まれの人類学者で、現在はシンガポール国立大学の客員上級研究員と、イギリスのイスラーム研究センターの名誉研究員の職に就いている。自身のウェ

ブページ（http://marranci.net/）でも述べているように、彼の興味はアルジェリアのレイ音楽、芸術、ジェンダー、ウンマ概念、エスニシティなどと幅広い。しかし、これらの多岐にわたるテーマは、ムスリムのアイデンティティを理解しようとする点で通底している。彼の問題意識の中心にあるものは、西洋社会の中で生活を営みながら、ムスリムとして生きていく人々をどう理解するかということである。2003年にイギリスのQueen's University of Belfastで博士号を取得したが、その博士論文*The Adhan among the Bells: Studying Muslim Identity in Northern Ireland*も北アイルランドのムスリムを対象としたものである。その後の論文は様々にテーマを変えながらも、ムスリムの移民問題やアイデンティティに関するものが多数を占める。2006年に最初の単著として*Jihad beyond Islam*を出版し、本書*The Anthropology of Islam*は2冊目の単著となる。翌2009年には*Understanding Muslim Identity: Rethinking Fundamentalism*, 2010年には*Muslim Societies and the Challenge of Secularization: An Interdisciplinary Approach* (Muslims in Global Societies Series)を立て続けに執筆しており、イスラームを専門とする人類学者として活躍している研究者の一人である。

本書は、著者が大学で「イスラームの人類学」を教えるかたわら、著者が学生や研究者と行ってきた「イスラームの人類学はどうあるべきなのか」という問いをめぐる議論を元に、2年間にわたる執筆と校正を重ねた結果、出版された本である。イスラームの人類学を広く概観しつつ、これまでの著者の研究と同様に、ムスリムとしてのアイデンティティは何であるかという問いが貫かれている。

本書の前半部では、これまでのイスラームの人類学の議論を振り返りながら、イスラームの人類学とは何かを考察する。そこでは、人類学的な調査が中東の農村部を対象としており、オリエンタリズムやエキゾチシズムの視点によって社会や文化を描き出してきた点を指摘する。後半部では中東地域に限らず、移住先のムスリムを対象にした人類学の研究の必要性を述べ、彼らのアイデンティティについて考察する。その際に、帰属性のある文化集団が存在するのではなく、本人たちの情動（emotion）や感情（feeling）に着目して、彼ら自身が感じていることを出発点に、アイデンティティの理解をするべきだと著者は結論付ける。

評者が本書を扱った理由は2点ある。1点目は、マグレブ諸国に代表されるように、イスラーム国家を考える際に、欧州への移民問題が切り離せない問題として存在する[1)]［岩崎 2010: 256–260］。著者が述べるように、これらのムスリムを通じてイスラームというものをより理解できると考えたからである。2点目は、イスラームの人類学が、ムスリムをどう理解してゆくべきかという著者の考えが示されており、それらの議論を参考に、ムスリムを対象とした人類学のこれからのあり方を考察できると考えたからである。

以下では各章ごとにその内容を概観する。

第1章　序論
第2章　イスラーム――信仰と歴史と儀礼
第3章　イスラーム研究からムスリム研究へ
第4章　西洋におけるムスリム研究――9.11以前と以後
第5章　エキゾチックから身近な存在へ――ムスリムなかのフィールドワークのこれまで

1）評者の調査地であるチュニジアも、欧州への移民を数多く輩出している国である。2008年のチュニジア外務省の推計によると、チュニジアの総人口の10%に匹敵する105万人が海外に在住しており、そのうち82.6%が欧州（54.6%がフランス）に在住している［岩崎 2010: 256–260］。

第６章　ステレオタイプを超えて――ムスリムのアイデンティティを理解する試み
第７章　ウンマの逆説
第８章　イスラームにおけるジェンダーの動態
第９章　結論

第１章では、先行研究における問題点と、本書を通じた議論や主張が簡潔に述べられる。これまでのイスラームの人類学が、個々の具体性を持ったエスノグラフィーに終始してしまい、包括的で一貫した議論がなされてこなかったことが指摘される。アサドが「イスラームの人類学は、社会を映し出す明確な青写真を見出せていない」と言うように［Asad 1986: 16］、イスラームの人類学がその社会の特質を描ききれていないことに触れる。しかし、本書の意図は、イスラームの人類学が青写真を描き出すこと自体を問い直すことであると述べられる。著者は、人類学としてイスラームを理解するには、宗教学や神学の青写真に還元してしまうことを避けるべきであるとする。つまり、宗教学や神学のような本質主義的な理解を通じて人間の営みを考察するのではなく、個々のムスリムがどう感じているのか、彼らの情動や感情に着目することで活路が開かれると主張する。その論拠が後の章で述べられる。

第２章では具体的事例として、著者が関わりのあるムスリムを登場させ、彼ら自身がイスラームをどう捉えているかについて述べられる。彼らが語るイスラームに関する解釈や宗教観についての説明は、ある部分では同じ思想を共有しながらも、個々に微妙に異なっている。このことから、ムスリムのイスラーム解釈は一枚岩で固定的なものではなく、環境や政治的要因によって多様に変わりうるものだと著者は考える。それゆえ、イスラームの根源的なテキストや歴史を理解することとは別に、イスラームとはどう解釈されているかに主眼を置くことが、人類学者に求められるとする。それぞれの異なった社会的背景の中で生きるムスリムを理解するためには、彼らが自身の信仰に対してどのような情動を持っているかに着目するべきであると述べる。

第３章では、これまでのイスラームの人類学者の研究を論評しつつ、イスラームの人類学とは何であり、どうあるべきかが示される。ここで全ての議論を扱うことはできないが、著者は初期の人類学者がより「未開」で「原始的」な社会を希求したことに関し、オリエンタリズムやエキゾチシズムの影響があると指摘する。また、植民地時代の政治的な影響力が、研究内容や研究対象の地域と無関係ではないことを示す。そして、それらの影響が現在においても少なからず存在していることを指摘する。

また著者によると、イスラームの人類学を考える上では、ギアーツやゲルナーの評価は高くない。その理由は、彼らの関心がムスリムを理解することよりも、イスラームがどのような文化・社会であるかを解明することに焦点があたっていたからであるとする。一方、著者は本質主義を免れ、ムスリムにとっての個別具体的なイスラームのあり方を記述したギルセナンの研究［Gilsenan 1982］を高く評価している（pp. 38–39）。ギルセナンやゼインのような、現地のムスリムを理解することこそが、イスラームの人類学のあり方であるとする考えを支持する一方で、イスラームに通底する青写真を解明するべきであるとするアサドの考えには否定的である。著者はイスラームの人類学にまつわるこのような論争を振り返り、「イスラームの人類学は何かという問いは、未だに議論がなされており定義することは難しい。しかし、何がイスラームの人類学でないかは断言できる」と結論づける（pp. 48–50）。それは、神学や宗教学のように宗派の特性や境界をとらえるのではなく、イスラームという宗教が何かを問うことでもない。イスラームの人類学は、個々人のムス

リムの理解を目指すべきだとする。

第4章では、ムスリム移民の変容について触れられると共に、それらの問題を人類学者が扱う際に浮上する議論について述べられる。西洋社会に同化されると想定されていたムスリム移民は、彼ら独自の共同体をつくり、社会的活動を行うことで、ムスリムとしてのアイデンティティを保ってきた。そのことが、人類学者の研究対象となり、ムスリム移民が注視されてきたことが述べられる。そこでは、ムスリム移民や移民の二世は、イスラーム社会と西洋社会の間でハイブリッドなアイデンティティを持っているとする議論がなされる。しかし、著者はこのようなモデルとは距離を置く。その理由は、定義できるような文化を想定しているのは研究者の解釈によるものであるからとする。文化というものは、常に多義的な要素を含んでいるため、移民たちが2つの文化の狭間にいるという解釈を退けるべきであるとする。

第4章の後半は、9.11以降ムスリム移民がより中東のムスリムとグローバルにつながり合い、もはや局地的な問題というものがなくなりつつある状況で、人類学者がとりあげるべき諸問題について述べられている。例えば、2006年にデンマークの *Jyllands-Posten* 紙にムハンマドの風刺画が掲載され、西洋社会のみでは論じられない地域を越えた国際的な問題となった。そのようななかで、人類学者の役割とは何であったのか。イスラームの人類学者はこれらの問題に関して、ムスリムの感情や声に耳をあてた考察をする役割があると著者は述べる。

第5章では、人類学者がムスリムを対象にしたフィールドワークをする際に、どのような姿勢で臨むべきかについて、先行研究と著者自身の研究を参照しながら論じられる。著者によると、ムスリムを対象としたフィールドワークの指針となるような研究は多くない。特に9.11以降、イスラーム社会と西洋社会との軋轢が生じている時代において、人類学者がムスリム移民とどう関わりながらフィールドワークを行うかについて、非常に繊細な問題を伴う状況にある。政治的な文脈を背負ってしまうこともある人類学者が、インフォーマントの信頼を得て良好な関係を築くためには、共感や感情移入という情動の必要性があると著者は説く。人類学者はイスラームの宗教的知識だけでなく、対象のコミュニティの人々に共感するということが求められるとする。

第6章では、アイデンティティに関する先行研究を振り返りながら、著者の新しい見解が述べられる。ギアーツのように、文化を意味の体系ととらえ、人間はその体系の中で生き、個人のアイデンティティもそのような体系・文化に位置づけられるという主張に対して、著者は異なる立場をとる。著者は人間をそのような文化的に構築された存在として理解するだけでなく、個々人の人間性に着目するべきであると述べる。そして、近年の神経科学分野のダマシオの研究結果［Damasio 2000］に論拠をもとめながら、情動や感情といった生理的な立場から彼らのアイデンティティを理解するべきであるとする。ダマシオの議論に全面的に依拠する著者は、次のように情動とアイデンティティの関係について述べる。環境が刺激をつくり、刺激が情動／肉体的反応（emotion）を生み、情動は感情（feeling）を理由づけ、感情が自伝的自己に影響を及ぼし、それらの経験を通して人々のアイデンティティが形成される（p. 97）。このようにアイデンティティは、情動や感情による個々人のイマジネーションによっているとし、「どのように感じるか」ということに焦点をあてることが、ムスリムをより理解できる鍵となると著者は述べる。

第7章では、ムスリムのコミュニティとウンマについて述べられる。実際のムスリムたちは、民族や人種によって様々なコミュニティに分化しているにも関わらず、彼らは民族や国の差異を超えたムスリムとしての帰属意識、ウンマの意識を持っている。前述のムハンマド風刺画問題のように、ある特定の地域の出来事も、世界各地のムスリムに反応を起こさせた。このように、地域を越

えたウンマ概念について「彼らがどう感じているのか」を理解するために、著者は前述した情動や感情の役割に着目する。そして、ウンマとは理性に基づいたものというよりはむしろ、共感や感情移入によって結ばれている「感情の共同体」であるとする。

第８章では、ジェンダーが議論の対象となり、これまでの情動と感情に着目した考察をジェンダー研究においても反映させる。人類学としてのジェンダー研究は、従来の研究のようなクルアーンやハディースを典拠とした女性性を扱うべきではないとする。むしろ、ムスリム（男性）として、またはムスリマ（女性）として、彼らは性差をどうとらえ、感じているのかに着目するのがイスラームの人類学としてのジェンダー研究であるとする。また、これまでムスリマについての研究が活発になされてきたことに対し、イスラームの男性性の研究の必要性が主張される。近年では、中東地域に焦点を当てたムスリムの男性性についての研究がなされはじめたものの、欧米に在住するムスリムのジェンダー研究の蓄積の少なさを指摘する。また、同性愛者についての研究の必要性も述べられており、今後の発展が望まれるとする。

第９章はこれまでの議論を振り返りつつ、本書を通じた主張がまとめられる。これまでの人類学者たちは、ムスリムが帰属する社会や文化をとらえようと試み、どのような宗教、社会、民族であるのかを問題としてきた。それに対して著者は、人類学者が問うべきは人の属性よりも人間性にあり、情動や感情に着目した考察をするべきであるという主張をする。そしてイスラームの理解とは、それらの情動や感情から引き出される地図を描くことであるとする。

本書では、これまでのイスラームの人類学における研究を振り返りながら、多様な議論が提示されてきた。そのなかでも、情動や感情というものに着目することでムスリムを理解するという論旨が貫かれ、多岐に渡る議論にも一貫した著者の主張が伺える。

ムスリムのアイデンティティを考察する際に、それらの情動や感情に注目する視点は確かに有効である。特に西洋社会におけるムスリム移民や、その二世・三世が対象である場合には、文化的な境界を問うことは難しく、それらの要素からムスリムを理解することには限界があろう。そこで、著者の述べるように「彼ら自身がどう感じているのか」ということを出発点としてムスリムのアイデンティティを考察する必要がある。その意味で、個々人の感情に着目した考察をするべきだとする著者の主張は、意義を持つものであろう。

しかし、情動と感情に着目する視点はどれくらい有効なものなのであろうか。著者は神経科学分野からの研究成果を引用して、アイデンティティの理解を試みるが、人類学がこれらの情動や感情に着目する際の問題点はないのだろうか。感情というものに、人類学者がどう向き合うべきかについて、菅原は感情によって自己を説明しようとする企ては愚かしいと述べ、感情は周囲の行為空間の構造と不可分であることを示す［菅原 2002: 339–340］。自らの感情を支配したり、または自らが感情の虜になったりする我々の感情を、著者が述べるようにとらえることは可能なのであろうか。これらの問題をどう克服するのかが、本書においては明確に述べられていない。個々人の情動や感情に着目してムスリムを理解しようと試みに対して、これらの点をどう解決するのか、具体的にどのような方法を使って対象と向き合ったらよいのか、今後の著者の動向に期待したい。

これらの疑問点が指摘できるものの、文化的・社会的な境界が曖昧になり、アイデンティティも多様化するなかで、情動や感情に着目する著者の試みは、ムスリム・アイデンティティを考察する際の一つの視座になろう。また、ムスリムの声に耳を傾け、彼らの気持ちに向き合い、それを汲み取ることを最も重視する著者の姿勢は、人類学者が現地住民と接する際の、ひとつのあるべき姿を

示している。2011年7月のノルウェー連続テロ事件のように、西洋社会におけるムスリム移民の問題が解決しないなかで、彼らの動態に密着している著者の研究を、今後も注視していきたい。

参考文献

岩崎えり奈 2010「海を越える出稼ぎと移民」鷹木恵子（編）『チュニジアを知るための60章』 明石書店，pp. 256–260.

菅原和孝 2002『感情の猿＝人』弘文堂.

ダマシオ，アントニオ 2003『無意識の脳 自己意識の脳』田中三彦（訳）講談社.

保坂裕子 2003「多声的時空間におけるアイデンティティ構築――アイデンティティ研究におけるナラティヴ・アプローチの可能性について」『京都大学大学院教育学研究科紀要』46, pp. 425–437.

メルローポンティ，モーリス 1967『知覚の現象学１』竹内芳郎・小木貞孝（訳）みすず書房.

ラトゥール, ブルーノ 2008『虚構の「近代」――科学人類学は警告する』川村久美子（訳）新評社.

Asad, T. 1986. *The Idea of an Anthropology of Islam*. Washington DC: Centre for Contemporary Arab Studies.

Damasio, A. R. 2000. *The feeling of What Happens: Body, Emotion and the Making of Consciousness*. London: Vintage.

El-Zein, A. H. 1977. “Beyond Ideology and Theology: the Search for the Anthropology of Islam,” *Annual Review of Anthropology* 6. pp. 227–254.

Gilsenan, M. 1982. *Recognizing Islam: Religion and Society in the Modern Middle East*. London: I.B. Tauris.

Ingold, T. 1996. “Against the Motion,” in Tim Ingold ed., *Key Debates in Anthoropology*, London: Routledge. pp. 112–118.

Marranci, G. 2006. *Jihad Beyond Islam*. Berg Publishers.

Milton, K. 2002. *Loving Nature*. London: Routledge.

GB (Gabriele Marranci). 2011. http://marranci.net/ （2011年7月25日閲覧）

（二ツ山　達朗　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Arzoo Osanloo. 2009. *The Politics of Women’s Rights in Iran*. Princeton: Princeton University Press, xix+258pp.

イラン・イスラーム共和国は1979年、イスラーム的価値観に基づく体制・社会をめざすイラン革命の結果、誕生した国家である。この革命によって、50年以上にわたり西欧的近代化を推進してきたパフラヴィー朝は崩壊し、革命の中心的指導者であったホメイニーが提唱する「法学者の統治」を基本理念に据えるイスラーム共和国憲法が制定された。国家の樹立と憲法の成立が共に国民投票に基づいており、一院制の議会を有するイランは、民主主義国家である。しかし革命から30年以上が経過してもなお、多くの人権保護団体は、イランの人々が抑圧されその人権が制限されていると主張する［FH 2011; HRW 2011］。特に、ヴェールに代表されるイスラーム式服装の着用義務化や家族保護法の撤廃は、革命が女性にもたらした負の側面としてしばしば取り上げられ［ナフィーシー 2006］、イラン女性の権利に関する研究も増加した［Afary 2009; Mir-Hosseini 2004, など］。